



但馬水産技術センターだより



漁況情報 (G2321号)

令和5年7月31日

兵庫県立農林水産技術総合センター
但馬水産技術センター 発行

2023年度第2回日本海スルメイカ長期漁況予報をお知らせします。

国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所と日本海沿岸各道府県水産関係機関等が検討し、水産資源研究所がとりまとめた2023年8月～12月のスルメイカ漁況予報をお知らせいたします。

【今後の見通し(2023年8月～12月)】

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（右図参照）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

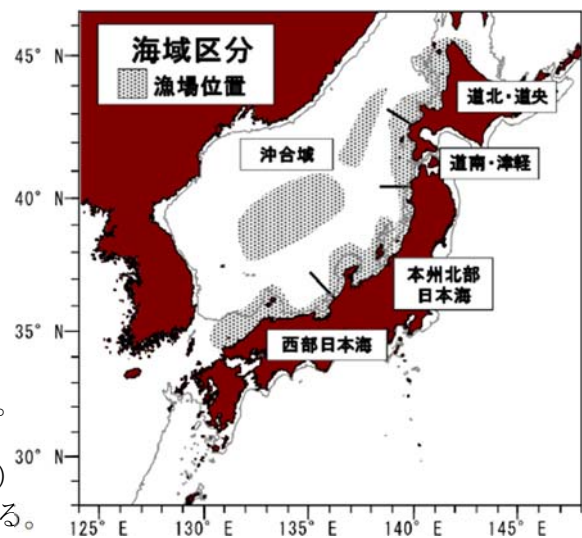
対象魚群：主に秋季発生系群、
後半は冬季発生系群も含む

1. 全体の来遊量は前年および近年平均を下回る。
2. 西部日本海（福井県～長崎県、小型いか釣り）
 - (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
 - (2) 漁場：近年同様、漁場が形成されにくい。
3. 沖合域（北海道西沖～大和堆周辺海域、いか釣り）
 - (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
 - (2) 漁場：近年と比べて漁場が形成されにくい。

※「近年平均」は最近5か年（2018年～2022年）の平均、前年は2022年を示す。

詳細及び他海域の予報は、別添の予報文資料をご覧ください。

予報内容の詳細は、国立研究開発法人水産研究・教育機構のウェブサイト（プレスリリース：<https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/index.html>）に掲載されています。なお、漁況予報は、水産庁の「我が国周辺水産資源調査・評価等推進委託事業」により、資源の合理的利用、漁業経営の安定及び操業の効率化を図り、資源の持続的利用に役立てることを目的として行われているものです。



お問い合わせ先：兵庫県但馬水産技術センター（担当：鈴木）

TEL：0796-36-0395 FAX：0796-36-3684

E-mail：nouringc_tajima@pref.hyogo.lg.jp

HP：https://www.hyogo-suigi.jp/tajima/

2023年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2023年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

1. 道北・道央海域（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁場：近年と比べて漁場が形成されにくい。

2. 道南・津軽海域（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年並で近年平均を下回る。
- (2) 漁場：近年と比べて漁場が形成されにくい。

3. 本州北部日本海海域（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁場：近年と比べて漁場が形成されにくい。

4. 西部日本海海域（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁場：近年同様、漁場が形成されにくい。

5. 沖合域（いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁場：近年と比べて漁場が形成されにくい。

* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（北海道西沖～大和堆周辺海域）。

* 近年平均は最近5年間（2018年～2022年）の平均、前年は2022年を示す。

* 道北・道央海域は8月～9月を対象とする。

I 予報の説明

2023年6月までの日本海沿岸各地の漁況の経過、6月中旬～7月上旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査（以降、上記調査をいか釣り調査と呼称する）の結果、冬季発生系群を主体とした太平洋側への来遊状況（2023年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報）、直近の漁況の情報、および9月までの海況予報（2023年度 第2回 日本海海況予報）を情報として、今期の漁況を予測した。

1. 道北・道央海域（小型いか釣り）

本海域では、近年、7月と10月に2回の漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は夏季に日本海を北上した後、南下する群のほか、道東・オホーツク海から宗谷海峡を經由して来遊する冬季発生系群も漁獲対象となる。

本年のいか釣り調査の結果では、本海域の調査CPUE（いか釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数）は前年および近年平均を下回り、また、8月～9月に当海域に来遊してくると考えられる道南・津軽海域の調査CPUEは前年並に少なく、近年平均を下回った。以上の結果から8月～9月の来遊量は前年および近年平均を下回ると予測される。なお、10月以降については冬季発生系群が漁獲の対象に加わるが、現時点では宗谷海峡からの来遊量に関する判断材料が揃わないため予測ができない。

2. 道南・津軽海域（小型いか釣り）

本海域では近年、6月～9月に漁獲量のピークがある。また、11月～12月には、夏季に日本海を北上した後、南下する群のほか、太平洋側から津軽海峡を經由して来遊する冬季発生系群を対象とした漁獲量の増加が見られる場合があるが、近年はほとんど見られていない。

本年のいか釣り調査の結果では、本海域の調査CPUEは前年並に低い値であり近年平均を下回った。道南海域の本年6月の漁獲量情報は未集計であるが、参考情報として、青森県における本年6月の漁獲量は前年および近年平均を下回った。また、予報期間後半の来遊量に係る太平洋側の冬季発生系群の9月までの来遊量は、津軽海峡～道南太平洋海域および常磐～三陸海域で前年並と予測されている（2023年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報より引用）。以上のことから、本予報期間の来遊量は、近年では漁獲が少なかった前年並で近年平均を下回ると予測される。

3. 本州北部日本海海域（小型いか釣り）

本海域では、従来、5月～7月が漁期の中心であったが、近年、6月～7月が漁期の中心となっており、8月以降も漁場が形成される傾向にある。また、12月の漁場形成には、海況が大きく影響すると考えられる。

本年は5月以降に漁場が形成されておらず、5月～6月の漁獲量は前年および近年平均を下回った。加えて、予報期間後半の来遊量の目安となるいか釣り調査における全調査点の平均CPUEも、前年および近年平均を下回ったことから、本予報期間の来遊量は前年および近年平均を下回ると予測される。なお、12月の漁況は沖合冷水の張り出しとの関係が大きく、現時点では来遊量を予測できない。

4. 西部日本海海域（小型いか釣り）

本海域では10月以降に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。ただし、近年は10月～12月の南下群の来遊が少なく、漁場が形成されにくい。

本年5月以降の漁獲量は前年および近年平均を下回った。また、10月以降の来遊量の目安となる本年のいか釣り調査における全調査点の平均CPUEも、前年および近年平均を下回った。以上のことから、本予報期間の来遊量は前年および近年平均を下回ると予測される。

5. 沖合域（いか釣り）

本海域では2000年代以降、8月～11月に北海道西沖と、6月～7月および11月～12月の大和堆周辺海域で漁場が形成される年が多かった。しかし、2019年以降はこれまでの傾向と異なり、大和堆や北海道西沖で漁場が安定して形成されず、能登半島周辺海域や佐渡沖が主漁場となる場合がある。

本年のいか釣り調査の結果では、本海域の調査CPUEは前年および近年平均を下回ったことから、今期の本海域への来遊量は前年および近年平均を下回ると予測される。今季前半の表面水温および50m深水温は共に平年よりも「やや高め」と予測され（2023年度第2回日本海海況予報^{1, 2)}、7月7日発表）、漁場形成が不安定化した2019年以降同様の傾向である。また、本海域における調査CPUEは全点において低い値を示すことから、沖合域は全域で漁場が形成されにくいと予測される。

¹⁾ https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2023/20230707_japansea/20230707_jpn_press.pdf

²⁾ 日本海海況予報における平年は1986年～2015年の平均

II 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海におけるスルメイカ秋季発生系群の分布状況を、日本海側の7道県および水産研究・教育機構による調査船でのいか釣り試験操業（6月中旬～7月上旬に実施）によって調べた（図1）。

今期の本調査のCPUE（いか釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数）は調査海域全体において分布密度が低かった。また、2019年以降の漁獲の無い調査点が多く見られる傾向は継続していた。

1) 全調査点の平均CPUE

いか釣り調査における全調査点の平均CPUEを日本海への来遊量の目安として示した。2023年の調査CPUEは0.49尾で、前年（2.05尾）および近年平均（7.87尾）を大きく下回り過去最低となった（図2）。

2) 魚体の大きさ

いか釣り調査の外套背長組成を図3に示す。2023年は19cm台にモードを持つ扁平な形をしており、前年（15cm台）よりも大きい傾向にあった。スルメイカの分布状況（図1）からは、北海道西沖の海域では外套背長16cm台以下の小型個体の漁獲割合が高く、反対に西部日本海海域では小型個体がほとんど漁獲されない傾向が見られた。

3) 各海域の調査結果

- (1) 道北・道央海域の調査CPUEは最大で3.4尾、次いで1.2尾となった以外はいずれの調査点においても0.5尾を下回り過去最低水準であった。漁獲の主体は外套背長16cm台以下の比較的小型の個体であった。
- (2) 道南・津軽海域では、前年同様スルメイカがほとんど漁獲されず、本年の調査CPUEはいずれの調査点においても0.3尾未満であり過去最低水準であった。
- (3) 本州北部日本海海域では、調査CPUEは最大で4.6尾、それ以外の調査点においてはいずれも0.2尾未満であり過去最低水準であった。漁獲の主体は外套背長17cm～20cm台の個体であった。
- (4) 西部日本海海域では、調査CPUEは最大で4.1尾、それ以外の調査点においてはいずれも0.7尾未満であり過去最低水準であった。漁獲の主体は外套背長21cm台以上の個体であり、外套背長18cm台以下の個体はほとんど漁獲されなかった。
- (5) 沖合域では、調査CPUEは海域内のいずれの調査点においても2尾を下回り、過去最低水準であった。

III 2023年6月までの日本海各海域の漁況の経過

2023年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。道北・道央ならびに道南・津軽海域は例年漁期が開始する6月の情報が未集計である。本州北部日本海海域での漁獲量は、4月は前年の40%で近年平均の61%、5月～6月は前年の27%、近年平均の25%であった。西部日本海海域での漁獲量は、4月は前年の50%で近年平均の60%、5月

～6月は前年の40%、近年平均の37%であった。以上のように、近年、5月～6月に漁場となっている本州北部日本海・西部日本海海域ともに、前年および近年平均を下回る漁獲で、漁場はほとんど形成されなかった。

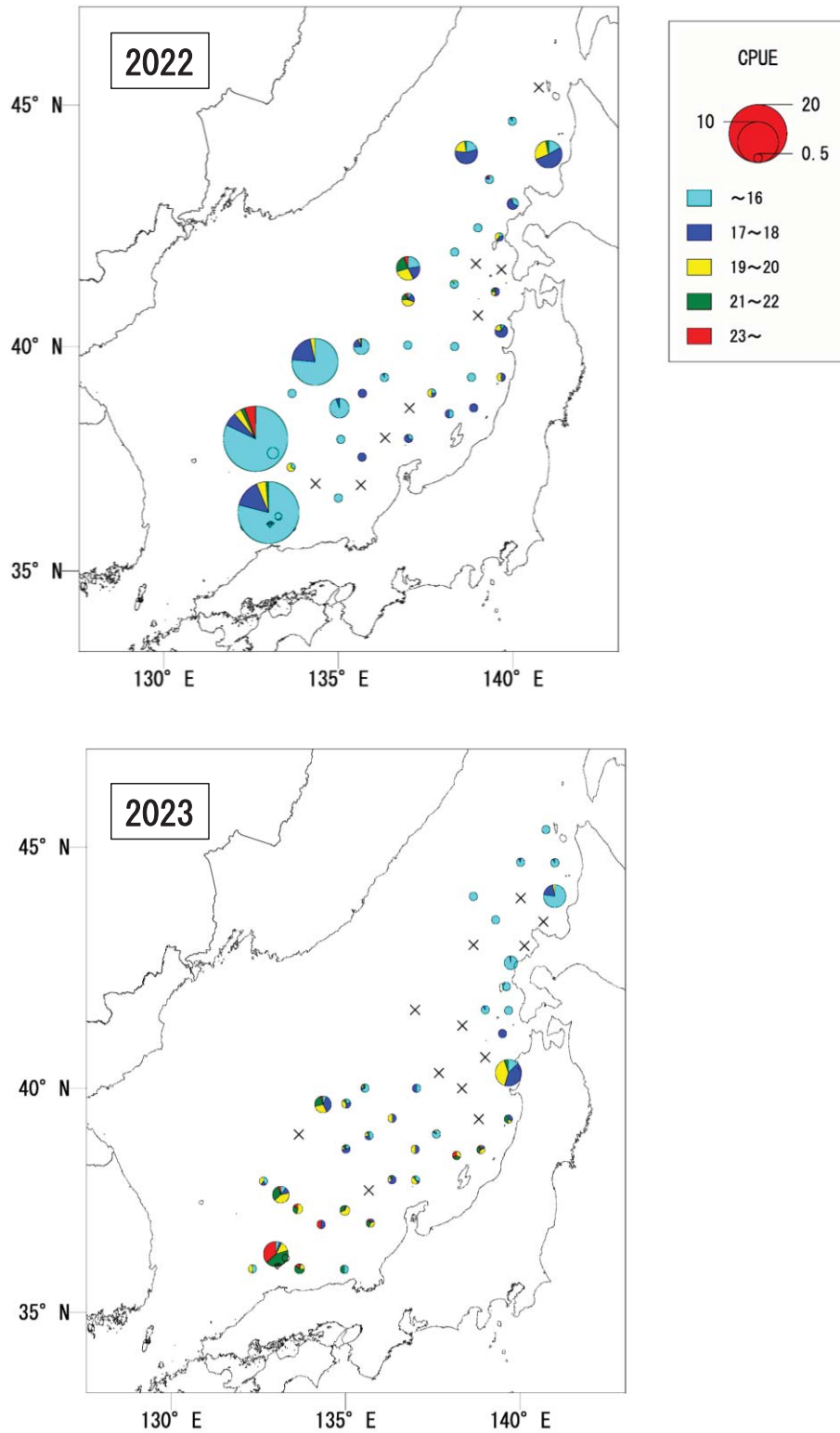


図1. 日本海におけるスルメイカの分布状況（2022年と2023年の日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果）
 図中×は漁獲がなかった点を示し、●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（いか釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数）を示す（CPUEが0.5未満の点については●の大きさを最小とした）。また各色は各外套背長範囲（cm台）の比率を示す。

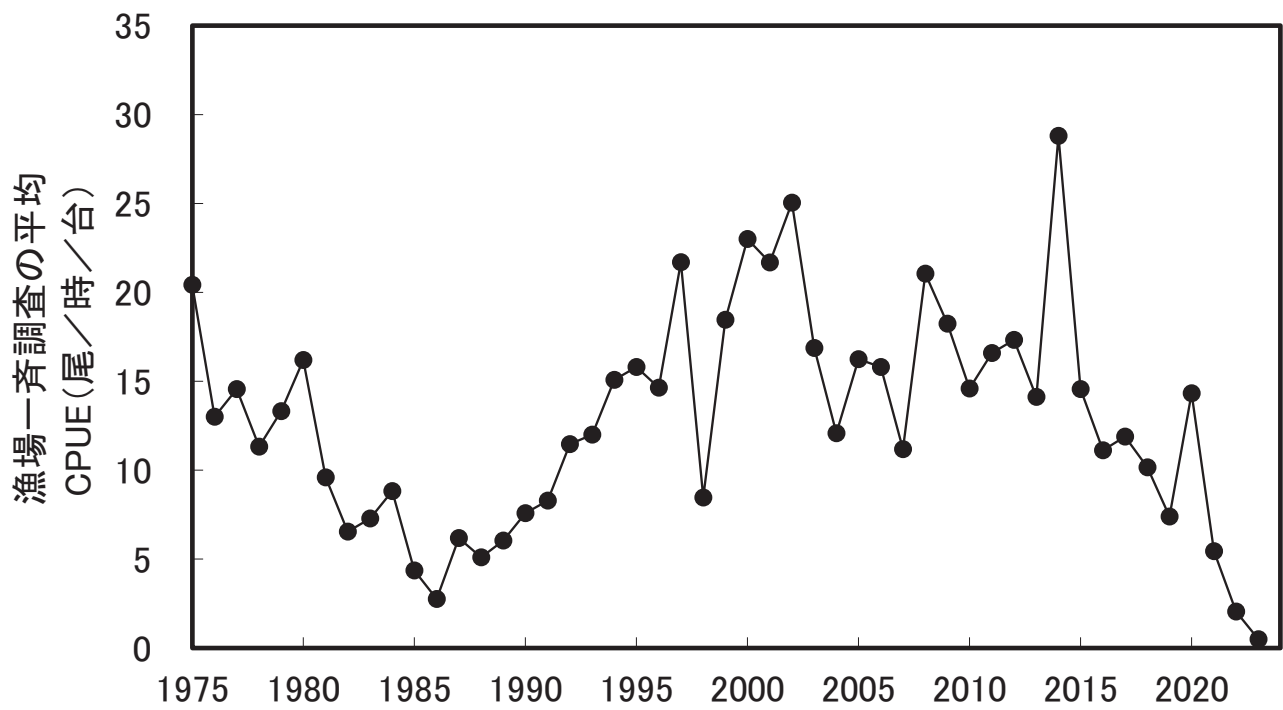


図2. 日本海スルメイカ漁場一斉調査における全調査点の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数）の推移

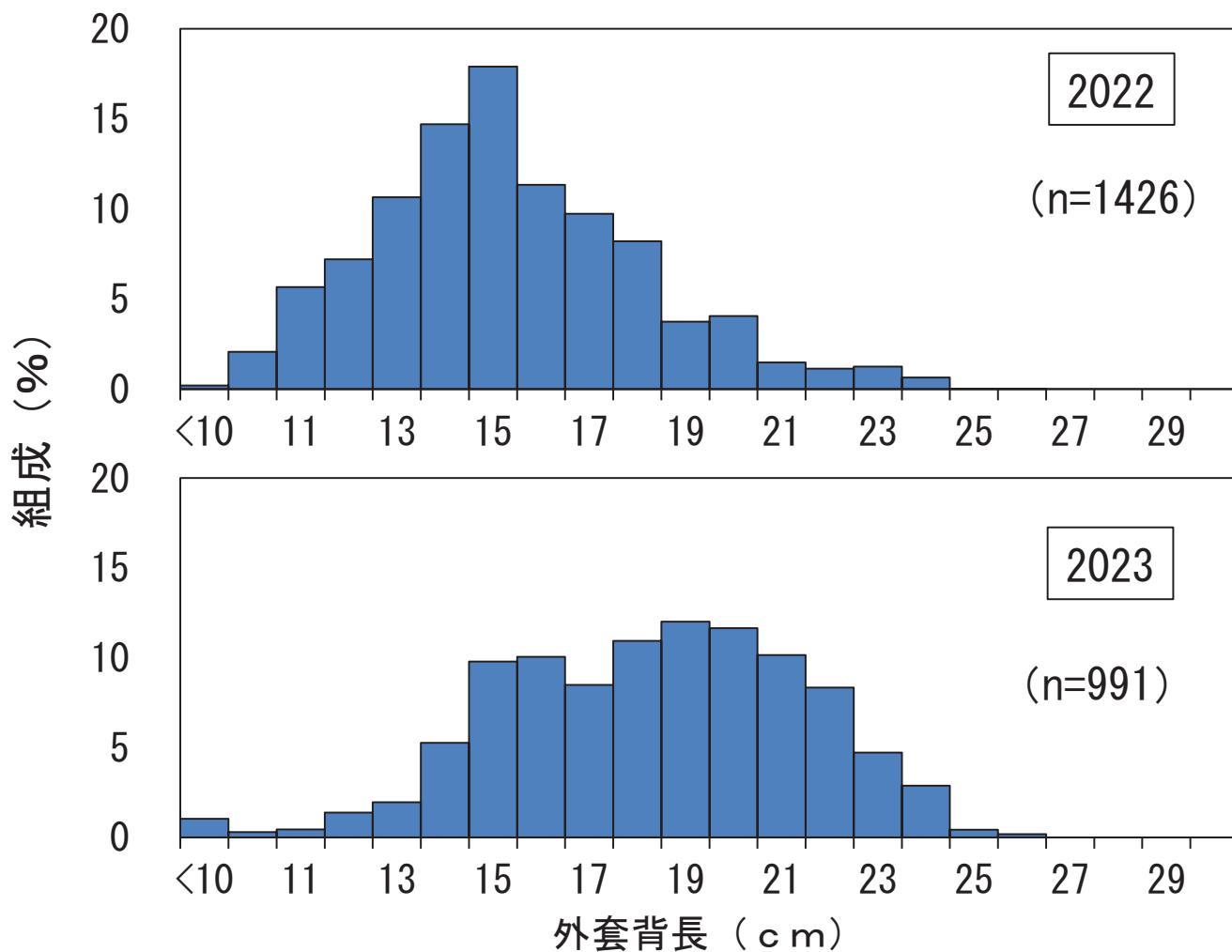


図3. 日本海スルメイカ漁場一斉調査で採集されたスルメイカ外套背長組成
各調査点の組成をCPUEで重み付け平均した後に全体の組成を作成している。図中のnは測定尾数を示す。

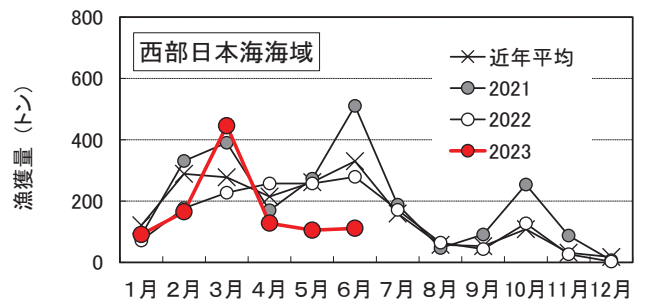
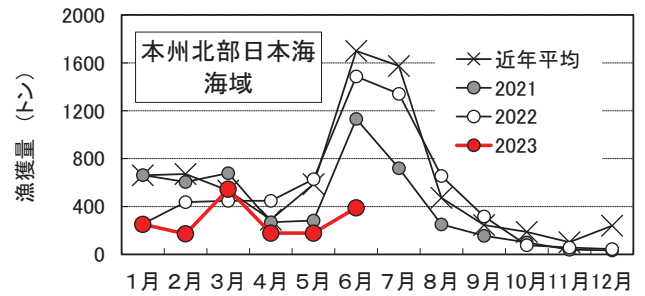
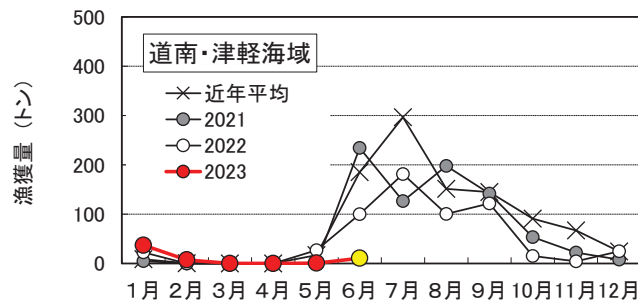
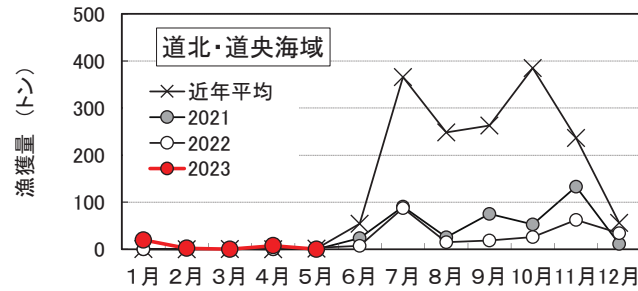
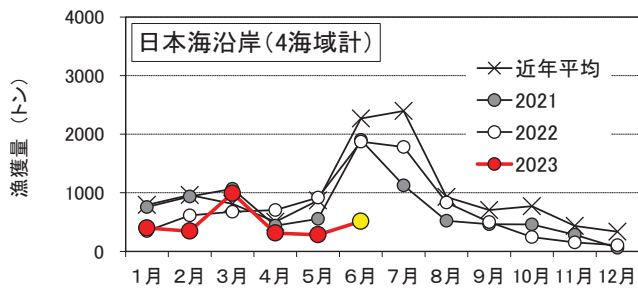


図4. 日本海沿岸（4海域計）および日本海各海域の生鮮スルメイカの主要港漁獲量（速報値を含む。また日本海沿岸（4海域計）および道南・津軽海域の6月には未集計値も含む。未集計値を含む値は黄色のプロットで表示した。） 各道府県試験研究機関および漁業情報サービスセンターの資料より作成。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 函館水産試験場 中央水産試験場 稚内水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産研究所	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター (取りまとめ機関)
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所